園長先生の子育てひろば

令和３年６月

絶対音感

園長　山中　文

園便りにも書いたのですが、先日、待合中にぼんやりテレビを眺めていますと、ワイドショーで幼児教育における先進的な保育として「絶対音感教育」が紹介され、そのための鍵盤ハーモニカの演奏練習風景が映されていました。絶対音感教育をすることによって、集中力や記憶力があがるのだそうです。

なんとも驚きました。絶対音感とは、ある音を聴いた時に、他に基準となる音が無くても、その音高がわかるような能力です。たしかに、概ね幼児期の間までに獲得しないと、その後は得られないと言われることもある能力です。

しかし、相対的な音高感覚がわかることは重要ですが、絶対的な音高がわかるといった能力は子どもたちにくまなく必要なものであるとは思えません。幼児期にそれに特化した「練習」は必要でしょうか。また、やみくもに鍵盤ハーモニカの練習をすることが絶対音感を身につけることになるとは考えられません。さらに、絶対音感が集中力や記憶力があがるものになるということに確証もありません。そういうことをセンセーショナルに先進的な保育として番組が取り上げることが不思議でした。

音そのものについては、以下のような内容はさまざまな形で遊びとして取り上げることができます。

・身のまわりの音に気づく、聴き分ける
・音の立ち上がりや減衰に気づく
・音色、声色の違いに気づく、聴き分ける、イメージにあった音色、声色を選ぶ
・音の強弱や高低を身体運動でとらえる、つくる、効果を知る。

たとえば、缶で作成したマラカスに中身（ビーズ、どんぐり、アイロンビーズ）の絵を貼り、一つにだけ「？」と書いておきます。子どもたちは遊び中に音を鳴らして聴いては選んだり、「？」の音を考えたりします。時には、音当てクイズにも発展します。自然に音の違いに留意していくようになります。

また、たとえば音の強弱については、音楽版宝探しゲームをしたりします。クラスであるものを隠し、鬼役の子どもがそれを探します。クラスの子どもたちは机や床を叩いて、鬼に宝のありかを知らせます。鬼が宝に近づいたら大きく、離れたら小さく叩きます。自分たちで叩いた音が大きくなったり小さくなったりするのが楽しくて、またそれを手掛かりに探す鬼を面白く応援したくて、特に年長さんで盛り上がる遊びになってい

ます。これなどは強弱をつくる面白さを知ることになります。

いずれも、絶対音感だけにとらわれず、さまざまな音の要素を子どもたちが遊びの中で見つけること、考えること、表すことになります。それも、必ず人とかかわりあって、音楽的なコミュニケーションを通してできます。

私たちは、表現する手段として、文字やことば、数、色や形、身体表現などとともに「音」を持っています。表現手段のひとつである音の面白さを見つけて活用していけるような素地が幼児期の教育としては必要だと考えます。

どうぞ音楽が訓練のひとつではなく、遊びこむもののひとつとなりますように。